安来市沢遺跡の発掘調査

林　　健亮

1　発掘調査の経緯と経過

沢遺跡は、安来市沢町から野方町の水田部に位置する遺跡である。この遺跡は『出雲国風土記』に記される教昊寺の推定地に隣接し、また、この近辺を古代山陰道が通過する重要な場所に位置している。この遺跡については、昭和53・54年に県道米子広瀬線の拡幅に伴って島根県教育委員会と安来市教育委員会が発掘調査を実施しており、昭和54年に行われた安来市教育委員会による発掘調査に関しては、『沢遺跡発掘調査概報』（安来市教委1980。以下、市概報と呼ぶ）が刊行されている。ところが、昭和53年の調査に関しては、教昊寺跡Ⅱb型式軒丸瓦[1]や「寺」と記された墨書土器など重要な遺物が出土しているにもかかわらず、未公表の概報（以下県概報と呼ぶ）があるのみで発掘調査報告書が刊行されていなかった[2]。

市概報によれば、島根県教育委員会は昭和53年１月25日に分布調査を実施し、県道米子広瀬線の道路改良工事の掘削土中から須恵器・土師器の破片約50点を採取。同日、遺跡の発見届けが出されたという。しかし、すでに工事が進展していたため、出土層位の確認調査を２日間実施し、その結果を基に同年７月から安来市沢町越石、同町井出尻、野方町下机の各地区で発掘調査を実施したとされている。

島根県埋蔵文化財調査センターに残されていた文書によると、県道米子・広瀬線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査については、昭和53年６月27日付け道発第171号で島根県土木部道路課長から島根県教育委員会教育長に発掘調査の依頼があり、昭和52年６月28日付け島教文第371号で受託した。昭和53年７月１日には島根県教育委員会教育長から文化庁長官宛て島教文第539号で文化財保護法第98条の2第1項の規定による発掘調査通知が提出されている。通知による調査地は安来市野方町の390㎡で、当時の現状は水田。文化庁は、昭和54年３月27日付け54委保記第23－155号で受理した。

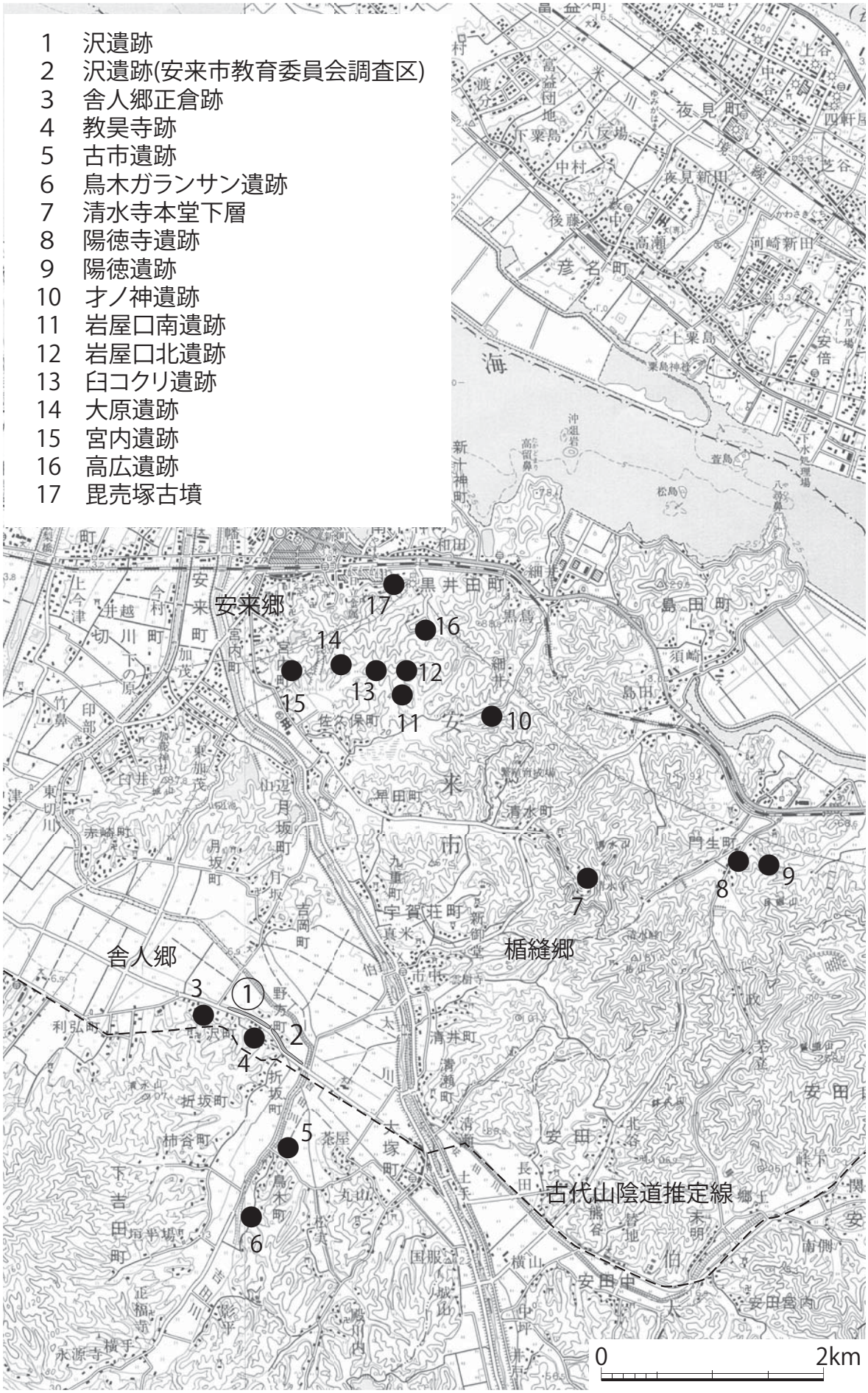
市概報に記される昭和53年の調査は７月から調査開始とされているが、調査日誌によれば、現地調査は昭和53年８月７日のグリッド設定から着手。その後８月31日には墨書土器が、９月13日には教昊寺跡Ⅱb形式軒丸瓦の大きな破片が出土するなどの成果を上げた。現地調査開始から約３か月が経過した10月31日に土層の検討を終え、現地を撤収した。この間、池田満雄氏、内田才氏、島田篤紀氏、野津弘雄氏、東森市良氏らを現地に招き、調査指導を受けている。

沢遺跡出土遺物のうち、墨書土器は島根県立八雲立つ風土記の丘資料館に展示されたことがある[3]。また、この墨書土器は『島根県内出土文字資料集成Ⅰ』（古代文化センター2003）に掲載された。

埋蔵文化財調査センターには、県土木部や文化庁に提出された少量の文書、調査日誌、35㎜カラースライドと35㎜モノクロネガ少量が残されていたが、実測図は残されていなかった。また、支出に関わる文書から６×９版の写真が撮影されていたはずだが、埋蔵文化財調査センターには残されていなかった。

一方、安来市教育委員会では、翌昭和54年５月23日から７月11日までの間に発掘調査を実施し、その概要は市概報に報告されている。しかし、この調査は東側の水田部で行われ、遺跡の中心部から大きく離れていたためか、出土遺物も多くはなかった。

昭和53年の沢遺跡の発掘調査は、前述のとおり『出雲国風土記』記載の「教昊寺」や古代山陰道のルートの推定に関わる重要な調査でありながら報告されていなかった。調査後すでに45年が経過し、当時の資料の多くが散逸しているが、残されている出土遺物等を整理し、現状で判断できる出土場所などを示しておきたい。



第１図　沢遺跡の位置と周辺の遺跡（S＝1:50,000）

2　沢遺跡の位置と周辺の遺跡

沢遺跡は、安来市沢町から野方町の水田部に位置（第１図）し、付近の標高は約７ｍである。この付近は、東西約４㎞、南北約1.2㎞に渡って広がる水田地帯で、遺跡はその南端に位置している。平野の東西は伯太川と飯梨川に挟まれる。この平野を形成したと思われる伯太川の支流吉田川は、伯太川の西側を伯太川に平行して北流し、安来市折坂町付近で西に流れを変え、この平野の中央を横切る。赤碕町付近で再び北に流れを変え、中海に注ぐ。遺跡の南側には小さな台地が延びており、この台地上に昭和60年に安来市教育委員会が発掘調査を実施した４教昊寺跡（安来市教委1985・1986a）とされる遺跡が所在する。教昊寺跡は、『出雲国風土記』記載の教昊寺の推定地と考えられ、瓦類が出土している他、神蔵神社の小祠の台座は塔心礎である。また、近年になって、この遺跡に関わる可能性のある礎石出土地の情報（安来市教委2000）がある。教昊寺跡の位置する台地は、南側にそびえる清水山（しみずやま：107.1m）から派生する尾根の先端にあたる。また、天台宗清水寺が位置する清水山（176.5m）が遺跡北東の伯太川を渡った先約１㎞に位置している。

古代の沢遺跡周辺は、天平五（733）年の年記を帯びる『出雲国風土記』によれば、意宇郡舎人郷に含まれると思われ、周辺には前述のとおり教昊寺跡と呼ばれる遺跡がある。この付近は、古代山陰道が通過していた[(4)]可能性が高く、遺跡の西側には炭化米が出土し３×１間の掘立柱建物が検出されたと言う３舎人郷正倉跡[(5)]とされる遺跡も知られている。また、遺跡の東側には教昊寺跡以外にも５古市遺跡（安来市教委1986b）、６鳥木ガランサン遺跡などの古瓦出土地が知られる。

『出雲国風土記』に見える舎人郷は、大舎人だった日置臣志毘が住んでいたことに由来する郷名と記されている。そうした事を反映したものか、舎人郷を中心とする安来平野の縁辺には16高広遺跡、13臼コクリ遺跡、15宮内遺跡（島根県教委1984・1993・1994）など装飾大刀や馬具などの優秀な副葬品、石棺を内包する横穴墓が多数知られている。

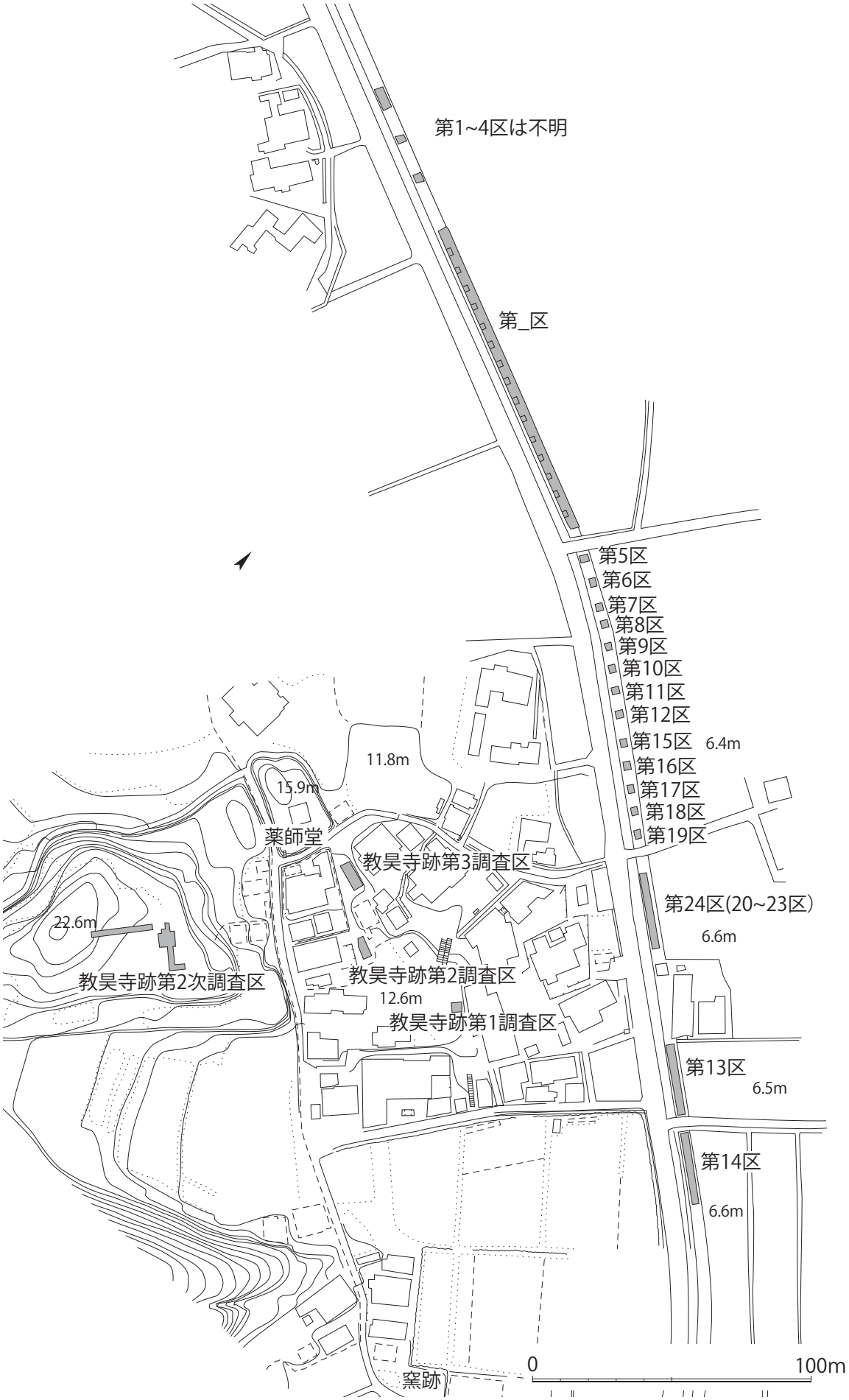
3　昭和53年度の沢遺跡の調査

県概報によれば、沢遺跡の発掘調査は県道米子・広瀬線の拡幅に伴って、県道に沿って延長約400m間にトレンチとグリッドを掘削している（第２図）。しかし、前述のとおり調査当時の実測図は所在不明で、調査日誌にも調査区名を記した図等はない。第２図は県概報に示された図から合成して作成したものだが、県概報の図にも調査区名は記されていなかった。そのため、第２図に示した調査区名は、調査日誌の所々に見られる調査区の位置に関わる記述から推定した。

県概報によれば、グリッドは３×３ｍを基本として15箇所。また３×８ｍ、3×114m（！）、３×26mのトレンチを各１ヶ所、２×25mのトレンチ２ヶ所が設定されており、県概報の配置図に示されるトレンチ等の大きさに概ね一致する。各調査区は、それぞれ深さ約１ｍ掘削。また、３×114mのトレンチ内には、深さ１ｍの小グリッド15ヶ所を掘削したと記される。調査日誌によれば、第20〜23区を連結し第24区としたことが記されており、３×26mのトレンチであろう。このトレンチは、まず第20〜21区の間を拡張してその間を第20'区とし、さらに第23区までを連結し、後に第24区とまとめられたらしい。

第１〜４区については、調査日誌にもその場所をうかがわせる記載がなかった。第１区については、８月７日の調査日誌に「３×３ｍのグリッド」と記されているが、９月13日の調査日誌に「第１・２区」と言う記載がある事から、第24区と同様に調査区を連結した可能性がある。とすれば、最も西側のやや長い調査区が第１・２区、続いて未確定の２つのグリッドが第３・４区だろうか。

「第＿区」と注記される遺物が多く見られるが、これは３×114mのトレンチであった可能性が高い。遺物の注記と調査日誌のいずれも第＿区と記されており、調査時に調査区の名称決定を保留し、後に付けるつもりが放



第２図　沢遺跡調査区配置図（S＝1:2,000）

置されてしまったようだ。この長いトレンチは、図上では小さな区画15個所が書かれており、床面からさらに深掘りされた小グリッドだった事を示すと思われる。第○断面穴と注記される出土遺物があり、この小グリッドを表すのであろう。しかし、小グリッドの番号に関する記載は調査日誌にはない。どちら側から番号が振られたのかは断定できないが、西側からか。

一方、調査日誌の記載と出土遺物の注記が一致しない資料がある。昭和53年９月13日の調査日誌には、第１・２区から軒丸瓦が出土したことが記され、瓦のスケッチも描かれているが、それと思われる軒丸瓦（６－１）には第８区780822と注記されている。８月22日の調査日誌は存在しないことから、その日は作業が行われていない可能性が高い上、９月13日の調査日誌には、出土時の様子が詳細に記されていることから、注記が間違っている可能性が高い。また、第８区780822の注記がある遺物は他にも多くあるが、上記の事からその出土地や出土年月日は疑わしい。

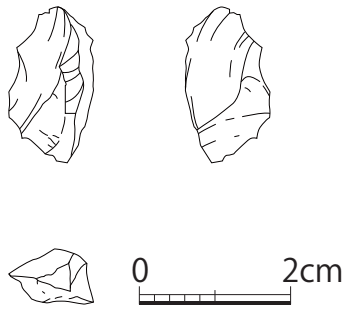
調査では激しい湧水に見舞われ、時期不明の杭列を発見した以外は遺構は検出できなかったとされる。この杭列について調査日誌には、住民から「県道に沿って川が流れていた」と言う聞き取りの記述があり、その川岸を示すと推定されている。県道が通る山裾にそって川が流れていたと考えられ、出土遺物の多くも砂層出土であることから、調査地は川の中だった可能性が高い。

出土遺物は、須恵器１点（５－３）以外は全て破片。瓦類に至っては全形の１／４以上を残す破片すらない。出土層位は、「砂層上面」や「砂層」に多く見られる。しかし、調査日誌によれば砂層は２面あるが、遺物の注記にはその区別はほぼない。８月31日の調査日誌には、墨書土器が出土した第９断面穴の土層模式図が書かれており、表土、混砂粘質土層、黒色粘質土層、砂層（第１）、黒色粘質土層、砂層（第２）の順に堆積している。墨書土器が出土した砂層（第２）の深さが地表から145㎝とある。第９断面穴は、第__区の床面からさらに掘り下げた部分であるため、掘削深度がかなり深いと考えられる。一方、９月１日の調査日誌には、第１・第２砂層の上面で遺物の出土が多いと記されている。調査区毎の遺物出土量の差は大きく、隣接する調査区で大きな差があることも多いことから、調査区毎に掘削深度が違っていた可能性が高い。

古墳時代以前の遺物の多くには「表採780404」の注記がある。現地調査は昭和53年8月から実施しており、調査以前の日付となっている。市概報によれば、昭和53年１月25日に県道の工事現場から土器約50点を採集しているが、埋蔵文化財調査センターに保管されている遺物にその土器を確認できないことから、それらの遺物を年度が替わった４月４日付けで注記したものか。また、780904と注記された遺物も780404の誤記か。一方、確実に発掘調査中に出土した遺物には、古墳時代以前の土器がほとんど含まれていない。市概報には、昭和53年1月25日に「すでに工事が進展していたため」とあることから、「表採780404」「780904」の注記のある遺物は、発掘調査地以外の場所で採集された可能性が高い。工事の進捗状況から、調査地より西側の県道敷部分だろうか。

４　沢遺跡出土遺物

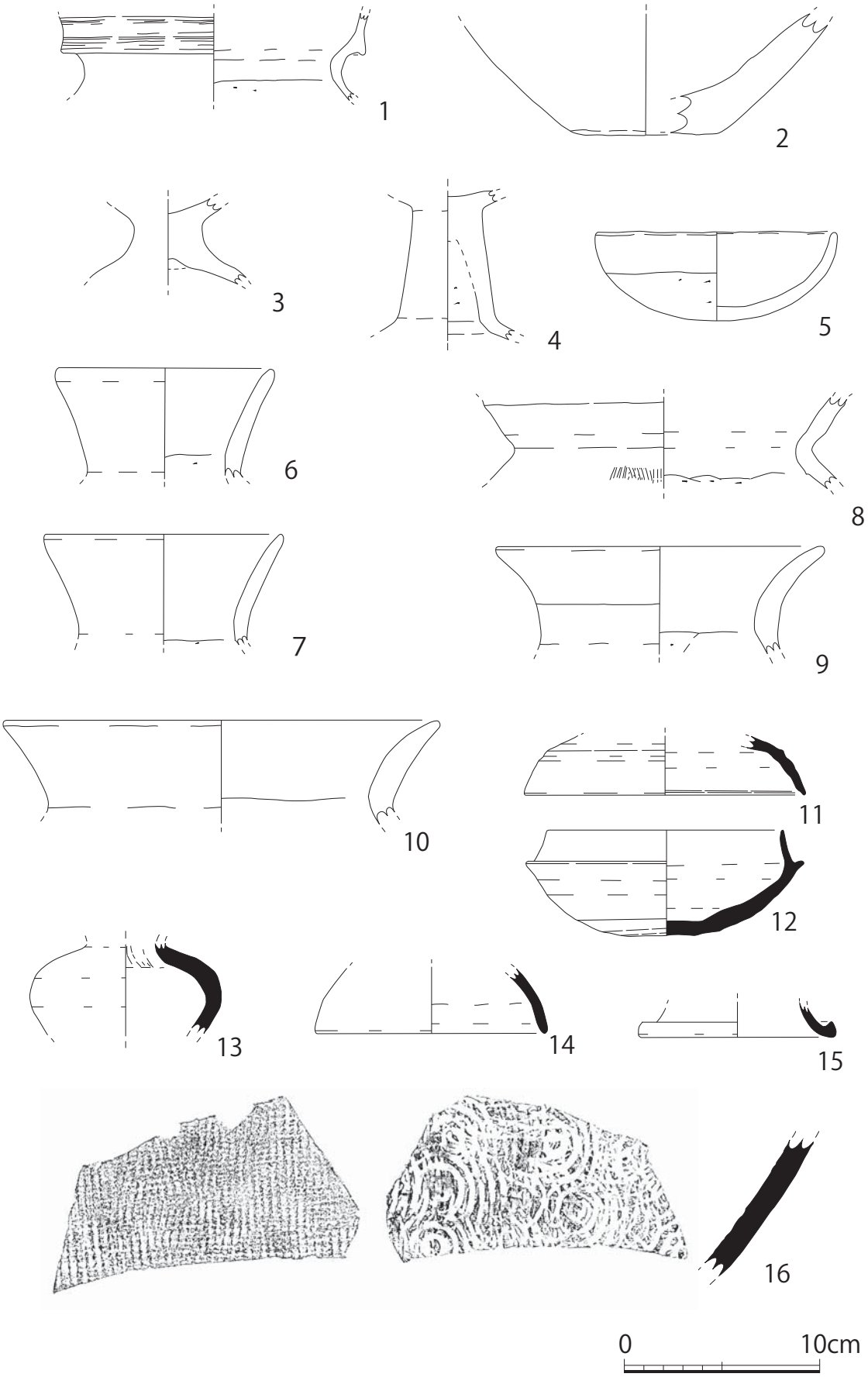
昭和53年度の発掘調査で出土した遺物は、コンテナ15箱。多くは洗浄・注記を終えているが、１箱分が未洗浄だった。出土遺物の多数を占めるのは古代の瓦類だが、完形品や大きな破片はなく、摩滅した小片が多い。土器類は弥生土器・須恵器・土師器。また、５箱分は近代以降の瓦や陶磁器類だった。この他、調査日誌９月７日には、第13区から金属製品が出土したことが記されているが、収蔵されているコンテナにはなかった。



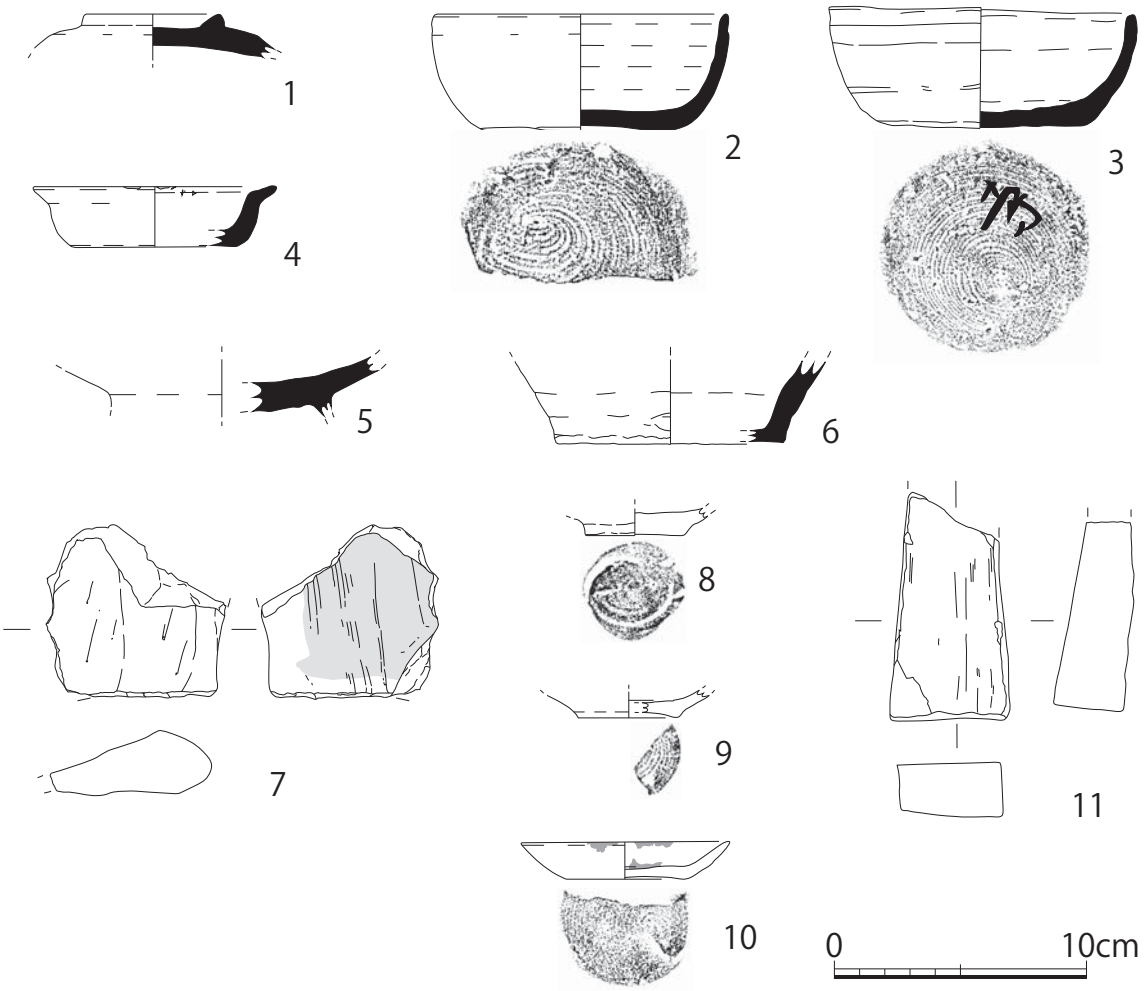
第３図　沢遺跡出土石器実測図
（S＝1:1）

（１）石器・土器・石製品

第３図は黒曜石の剥片で、楔形石器か。沢遺跡出土遺物に縄文



第４図　沢遺跡出土古墳時代以前の土器実測図（S＝1:3）



第５図　沢遺跡出土土器・石製品実測図（S＝1:3）

時代とみられる資料はこの１点のみ。なお、この石器には注記や荷札がなく、出土地や出土年月日はわからない。

第４図は古墳時代以前の土器類。4-1は複合口縁の甕。口縁部先端を欠く。「中学生表採」という荷札がつけられているが、出土地点はわからない。4-2は第20区の砂層から出土した弥生土器壺の底部。内外面ともにナデ。

4-3は土師器の低脚坏。注記や荷札はない。坏部の大半と脚端部を欠く。

4-4は高坏の脚部。坏部は残っていない。780404の注記がある。

4-5は土師器碗。小片だが口縁部がわずかに残り、全形を復元できる。内面は摩滅し、調整不明。この土器にも注記・荷札がない。4-6・7は、土師器壺の口縁部。頸部から直性的に開く形状で、内外面ともにナデ調整。体部内面にはケズリが見える。4-7には780904の注記があるが780404の誤記か。4-8は土師器甕。口縁部先端を欠く。体部外面にススが付着している。4-9・10は口縁部が緩やかに外反して先端を丸く収める甕。いずれも780904の注記がある。

4-11～16は須恵器。4-11は口縁部内面に段を残す蓋。4-12は直立する高いカエリのある坏。半分近くが残存する。4-13は瑳。体部の小片で、頸部や注口は残していない。4-14は口縁部を丸く収める蓋。内外面ともにナデ。4-15は高坏の脚端部。第15断面穴から出土した。4-16は甕の胴部。甕胴部の破片は複数出土しており、いずれも外面に平行タタキ、内面に同心円文の当て具痕を残す。

5-1～6も須恵器。5-1は輪状つまみ部分の小片。上面には自然釉がかかる。出雲国府跡の第２形式（島根県教委2013）に含まれ、８世紀前葉のものか。5-2は須恵器坏。体部から口縁部は緩やかに立ち上がり、強いアクセントはない。底部に回転糸切り痕を残す。5-3も同様のもの。注記がないが、調査日誌から第__区第９断面穴の

地表下145㎝付近、砂層（第２）で出土したと思われる。底面に墨書「寺」が記される[6]。底部は回転糸切りで、体部にゆがみがある。出雲国府跡の第4型式に含まれるもの。5-4は口縁部を折り曲げる小型の杯で、平城分類の須恵器皿E[7]。口縁部の内外にわずかにスス状の付着物が見られ、灯火器として使用された形跡がある。5-5は高台の付く底部。壺か。5-6は壺の底部。内面から体部外面はナデ。底部は未調整。平安期のものか。

5-7は移動式竈の袖部分の基部。底面には繊維状の圧痕が残る。外面にはハケメ状の調整をわずかに残し、内面側に被熱痕が見える。5-8・9は土師器皿の底部。5-8の切り離しは回転ヘラ切りか。5-10は第３断面穴から出土した灯明皿。無釉の陶器で、口縁部の内外に油煙が付着している。近世～近代のものか。

5-11は砥石。第21'区から出土している。黄褐色を呈したきめの細かい石材を使用し、各面に使用痕がみられる。時期はわからない。

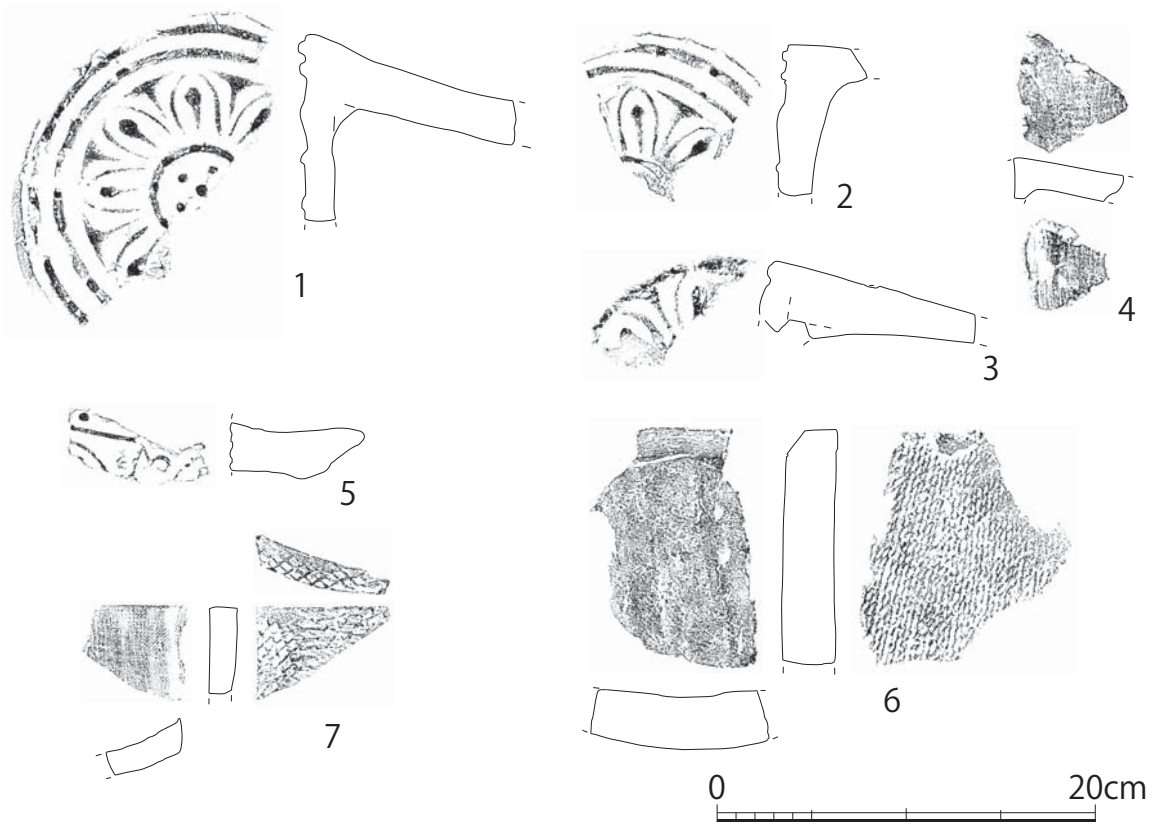
（２）軒丸瓦・軒平瓦

古代の瓦類は出土資料の大半を占める。この内、瓦当文様が確認できる軒丸瓦は３点で、瓦当面を欠損した軒丸瓦1点がある。また、軒平瓦は１点。瓦当文様が確認できる。

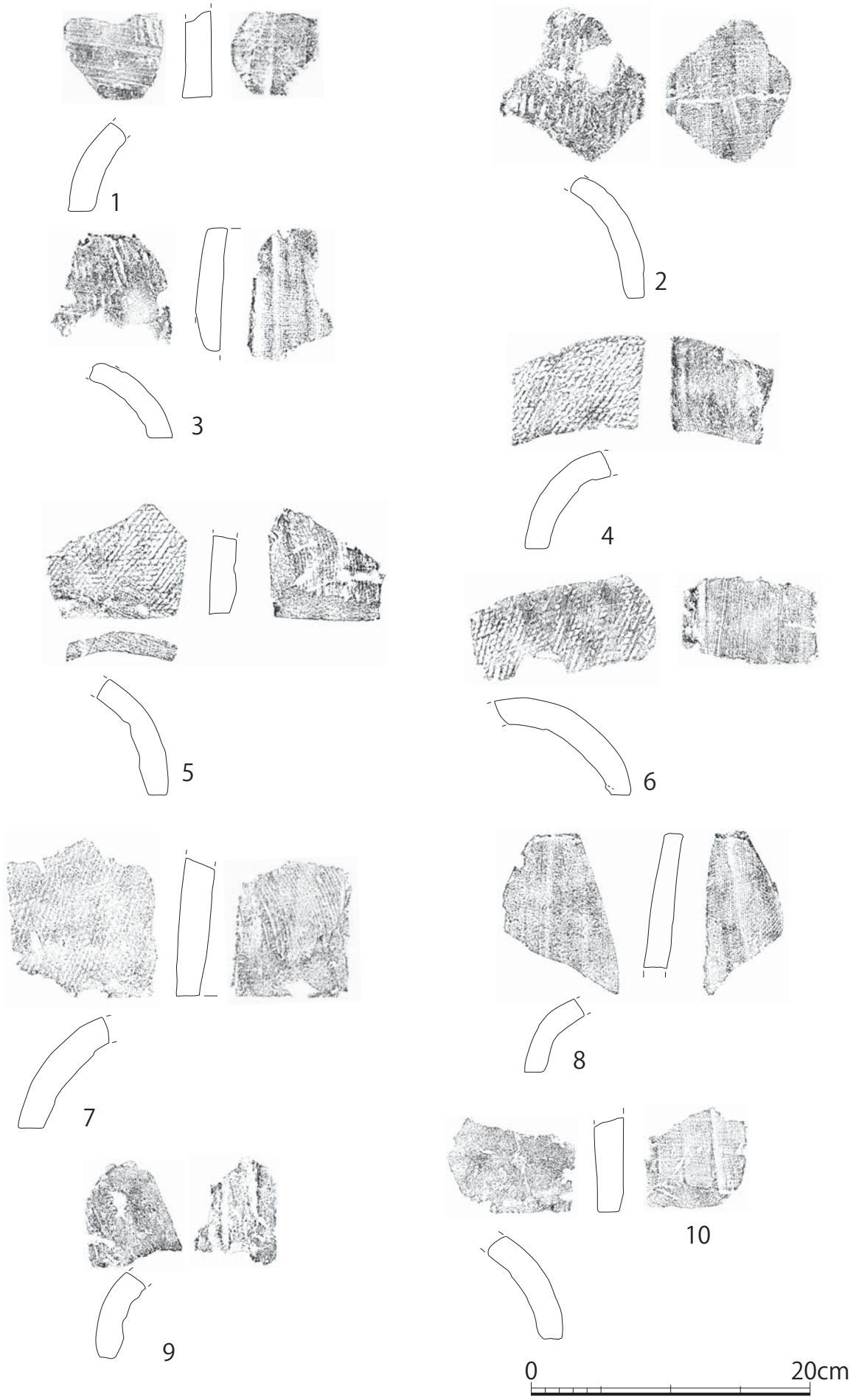
6-1・2は教昊寺跡Ⅱb型式軒丸瓦で、単弁８葉蓮華文。中房は１＋４。弁央にオタマジャクシ状の蓮子が伸び、間弁はT字形。外区は２重圏線で、中房の圏線を含め、各圏線上に珠文が配される。丸瓦部との補強粘土は薄く、取り付け位置は比較的高い。丸瓦部凸面は丁寧に調整されタタキ痕は残していない。第８区と注記されるが、第1・2区から出土した可能性が高い。6-2は外区内側の圏線の内側に低い突線が伸びており、範のずれによるものか。

6-3は教昊寺跡Ⅲ形式軒丸瓦の小片。８弁蓮華文で、外区蓮弁縁が外縁となるもの。中房付近は残存していない。瓦当面にも損傷が多く明瞭ではないが、蓮弁に木目を残しているように見える。瓦当裏面から凹面側の補強粘土が剥離し、丸瓦凹面の布目圧痕が見えている。

6-4は軒丸瓦の丸瓦取り付け部付近の破片。瓦当部は完全に剥離しており、瓦当文様は不明。丸瓦部凸面はナ

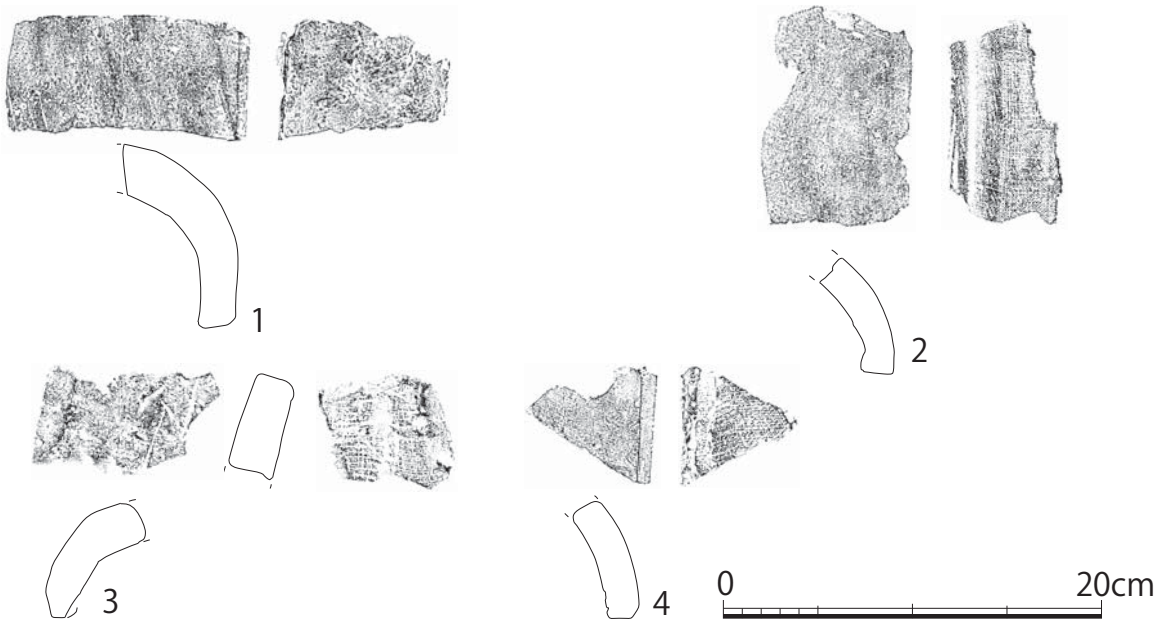


第６図　沢遺跡出土軒丸瓦・軒平瓦実測図（S＝1:4）



第７図　沢遺跡出土丸瓦実測図（１）（S＝1:4）

第８図　沢遺跡出土丸瓦実測図（２）（S＝1:4）



第９図　沢遺跡出土丸瓦実測図（３）（S＝1:4）

デ調整されるが、わずかに縄タタキを残しているように見える。

6-5は教昊寺跡Ⅲ型式軒平瓦の中心飾付近。両脇から展開する唐草文。三角に尖る中心飾と上外区の殊文1個が見える。瓦当面の一部を残すのみで、平瓦部や顎部の形状は不明。

6-6は平瓦の狭端部。非常に分厚く、凹面の布目をナデ消している事から軒平瓦か。凹面に模骨痕を残すが、布目はほとんど見えない。凸面は縄タタキ。端部は凹面側を面取りする。

6-7は斜格子タタキの平瓦。端面にも凸面と同様のタタキを施しており、軒平瓦として使われる瓦か。側面を強く調整しており、鉛直方向に立って見えるが、凹面に細く丸みを帯びた模骨痕が見える。全面に薄く自然釉がかかる。端面に平行タタキを残す平瓦が教昊寺跡の他、出雲国府跡で知られている（花谷2010）。

（３）丸瓦

沢遺跡出土の瓦類は小片が多く、丸瓦についても狭端部の形状を確認できる資料は少ない。有段式と判断される資料はなく、確認できたものはすべて無段式だった。

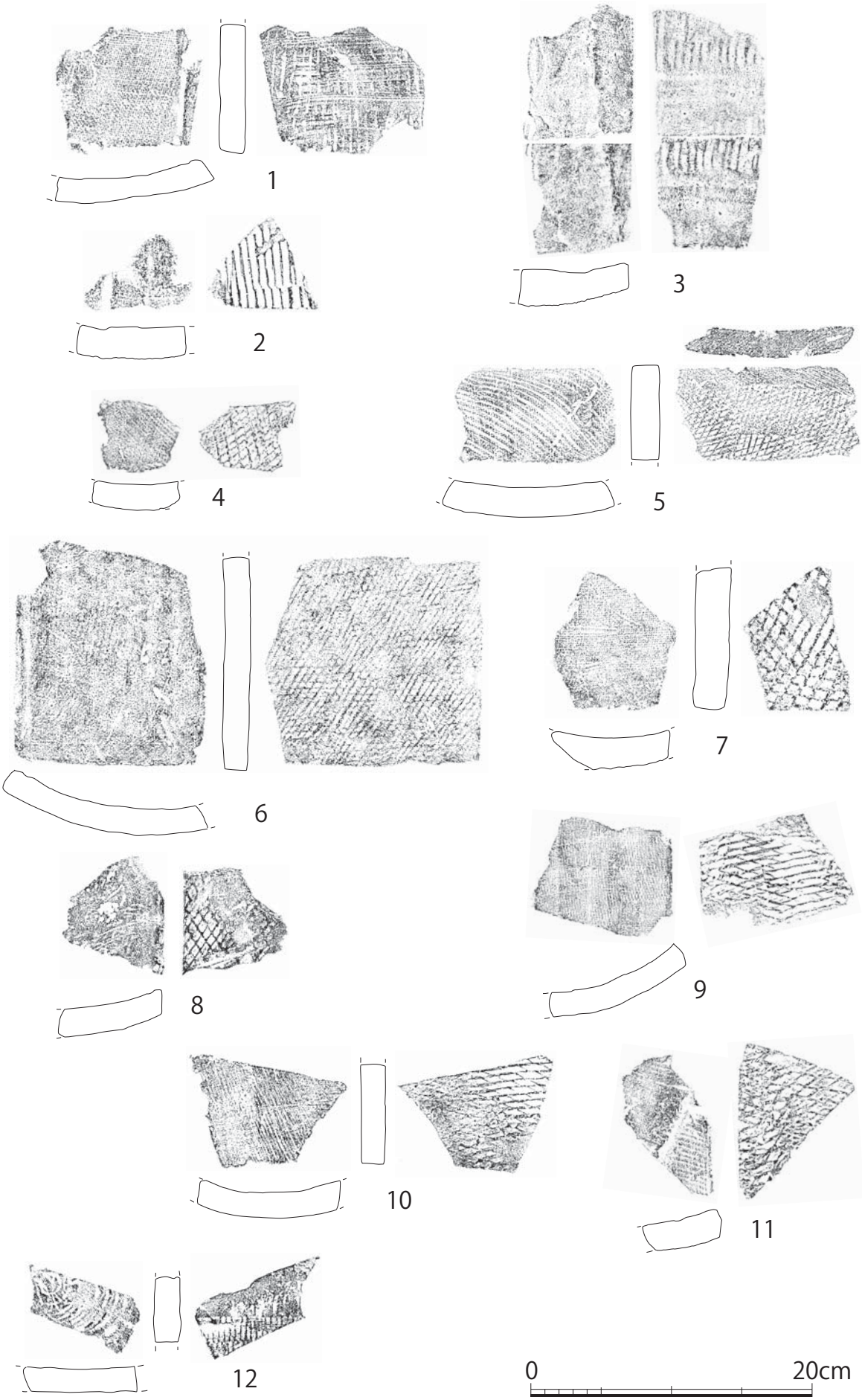
7-1～3は、凸面に平行タタキを残すもの。7-1はカキメにより、7-3はナデによりタタキ痕を消そうとしている。いずれも凹面に模骨状の痕跡を浅く残す。7-2・3の模骨状の圧痕は、細く丸みを帯びたもの。7-2の凹面には横方向に紐状の圧痕が見えるが、圧痕の内側には布目がわずかに見える。7-3の凹面側部は分割突帯痕か。7-1は広端部。7-3は狭端部の破片で、無段式か。

7-4～6は凸面に細かい斜格子タタキを残し、調整しないもの。凹面には布目圧痕のほか、模骨状の痕跡を残している。7-5は広端部と思われ、側部凹面側を面取りする。端面に糸切痕に見える細い筋状の痕跡を残す。

7-７は凸面の縄目タタキを全く調整しないもの。広端部の破片で凹面側を浅く面取りする。凹面には模骨状の痕跡を残す。還元炎焼成され硬質。

7-8～10は凸面を丁寧に調整しタタキ痕を全く残さないもののうち、凹面に模骨状の痕跡を残すもの。7-8・9は狭端部の破片で、隅を斜めに落とす。段の痕跡はなく無段式。7-10は広端部と思われる破片。凹面側の側部近く、広端より３㎝程の位置から側部に沿って棒状に抜けて見える部分があり、分割突帯痕か。

第８図は凸面調整を行うが、縄タタキの痕跡を残し凹面に模骨状の痕跡を残さないもの。8-1は狭端部のやや大きな破片。隅を斜めに落としている。反対側の隅付近もきれいに直線的に割れていることから、隅切り丸瓦か。無段式。8-5の側部は反り返った形状となっているが、粘土板の継ぎ目に布が挟み込まれたように見える。8-7は



第10図　沢遺跡出土平瓦実測図（１）（S＝1:4）

布の合わせ目も厚く重なり、拓本では白く抜けている。8-9は布の合わせ目や糸切痕を明瞭に残す。8-10は広端部。8-11は凸面に太い縄を使用したタタキ痕を残す。凹面端部近くには紐状の圧痕が見える。第4断面穴から出土した。

第９図は凸面を丁寧に調整し、凹面側に模骨状の痕跡を残さないもの。9-3の凹面には布の合わせ目が残る。9-4の凹面側部近くには布の合わせ目や粘土板の継ぎ目とみられるくぼみが残る。

（４）平瓦

10-1～3は平行タタキを残す平瓦。10-1は細い平行タタキの後、横方向にカキ目を施す。丸瓦7-1～3と同様のものか。凹面には浅く模骨痕を残し、側部の形状も弧芯を向くことから桶巻き造りであろう。10-2は単位が太く深いタタキ痕を残すもの。凹面には模骨痕を明瞭に残す。10-3は２片が接合した。酸化炎焼成され摩滅が進む。幅４㎝程の間隔で、タタキが見えない部分がある。摩滅のため判断しがたいが、帯状にナデ消しているか。凹面には模骨痕を残すが、側面は鉛直方向を向く。強い調整によるものと思われるが、摩滅が進み側面の調整は見えない。

10-4～6は細かい格子タタキを残すもので、軒平瓦の可能性がある6-7と同じもの。10-5・6の凹面には薄く模骨痕を残す。いずれも凹面側に糸切痕を明瞭に残しており、タタキ締めが緩い印象がある。10-6は側部が円弧の中心方向を向く。模骨痕が見えない10-4も含め桶巻き造りか。10-5の端面は斜め方向に糸切状の細い条線が見える。

10-7はやや大きな斜格子タタキのもので、10-8も同様のものか。いずれも酸化炎焼成されやや軟質。側部が鉛直方向を向き、模骨痕も見られないことから一枚造りか。

10-9～11は細い平行タタキを交互に打った疑格子タタキ。いずれも凹面に模骨痕を残す。10-11は布の合わせ目も明瞭に残す。

10-12は、一見須恵器甕に見えるが、曲面のない扁平なもので磚か。片面には同心円の当て具痕を、反対面には平行タタキ残す。平行タタキの面は部分的に平行タタキをナデ消しているように見える。

11-1は太く隙間があるように見える縄タタキ。狭端部の破片と思われ、凹面側から端部を面取りする。凹面に模骨痕を残す。

11-2～5は凸面に縄タタキを施し凹面に模骨痕を残すもの。この内、11-2・4は細く丸みのある模骨に見える。いわゆる竹状模骨。

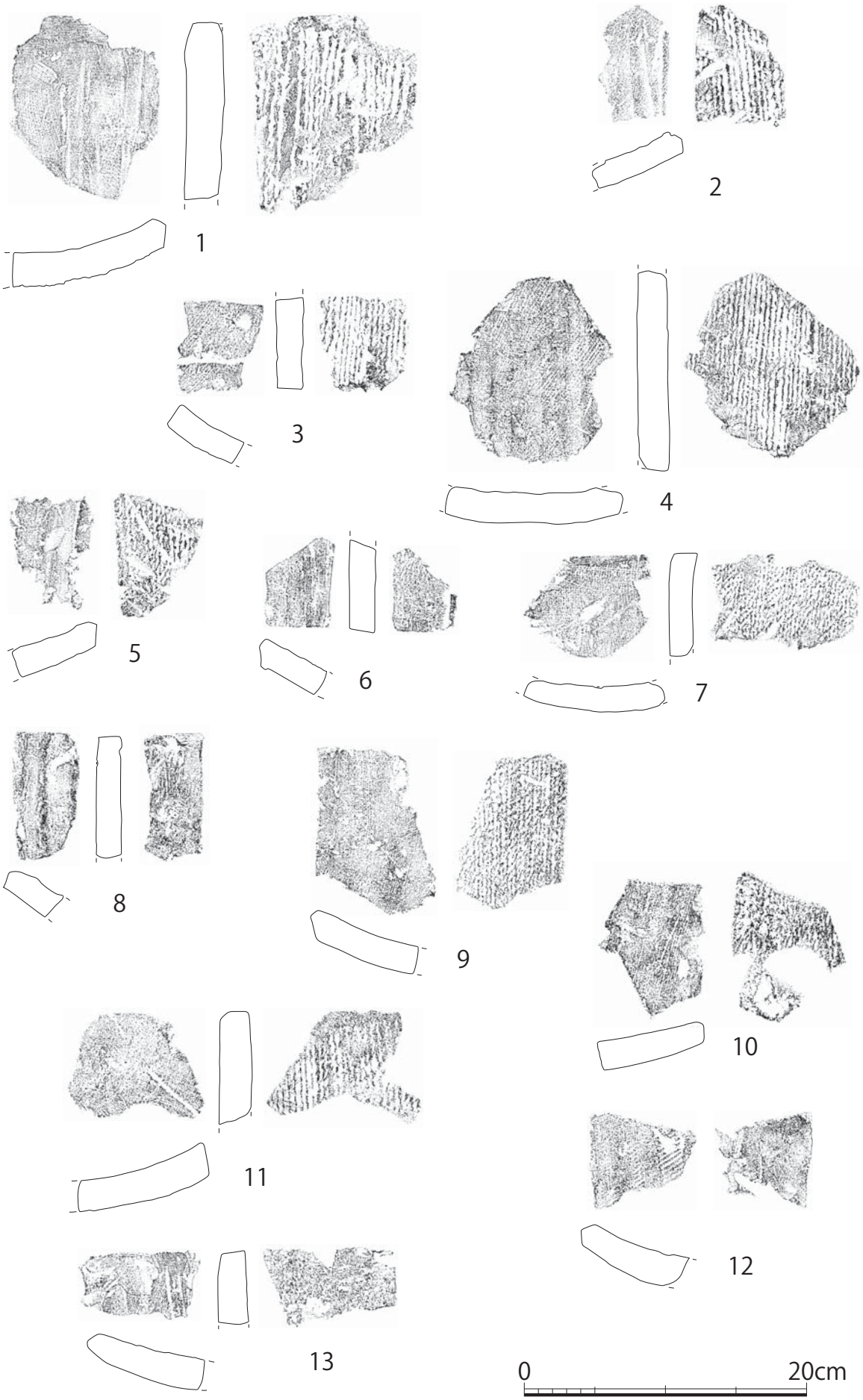
11-6は凸面をナデ消しているが、わずかに縄タタキの痕跡を残すもの。凹面に幅の狭い模骨状の痕跡を残している。平瓦として側部の形状を鉛直方向として図面を作成したが、湾曲がほとんどなく、扁平な板状となっており、道具瓦の一種か。凸面の側部に幅５㎜程の段があり、タタキ板が当たっていないように見える。スノコ状の一枚造り台で成形されたか。

11-7・8は細かい縄タタキを施し、凹面に模骨痕を残すもの。11-8は竹状模骨か。凸面の縄目をナデ消そうとしている。

11-9～11は凸面に縄目タタキを残し模骨痕を残さないもの。いずれも側部は鉛直方向を向く。11-10は凸面にわずかにハナレ砂を残す。

11-12は凸面をナデ消すもの。凸面側にも側部近くにわずかに布目圧痕が見える。やや厚みがあることから軒平瓦の平瓦部か。

11-13は凸面にハナレ砂を使用したもの。タタキはわからない。沢遺跡で出土した平瓦にハナレ砂をはっきりと残している資料は少ない。



第11図　沢遺跡出土平瓦実測図（２）（S＝1:4）

5　ま　と　め

現地での土層図等が残されておらず、調査区名も確実ではないが、遺物の注記からは第20区砂層からの出土遺物が圧倒的に多いことがわかる。第20区は、安来市教育委員会が教昊寺跡として発掘調査を行い、塔心礎が残されている台地の直下に位置している点が注目される。一方、調査区毎の出土量には極端な差があり、第20区周辺についても、東側に拡張した第20'区や約５m東に位置する第21区からの出土遺物は非常に少ない。これは、調査区毎に掘削深度が違っていた可能性を示唆しており、いくつかの調査区では砂層（第２）まで掘削されていなかったのではないだろうか。

出土遺物のうち、古墳時代以前の土器類は、出土場所が確定できない遺物が大半を占めている。これらは、発掘調査着手以前の工事現場での採集品の可能性がある。これらの採集地点は調査地よりも西側だったのではないだろうか。事実、出土調査区の明確な遺物には、古墳時代以前の遺物がほとんど含まれていない。

沢遺跡で出土した軒丸・軒平瓦はわずかで、教昊寺跡Ⅰ形式軒丸瓦や、額面施文の軒平瓦は見られなかった。第20区で出土した平瓦は、桶巻造り平瓦が中心となっているが、次に出土量の多い第８区からは縄目タタキ一枚造り平瓦の出土が目立つ。両調査区は約100m離れており、遺物の流入元である教昊寺跡側の状況を反映しているか。ただし、第８区の注記がある資料については、出土調査区が第８区かどうか疑わしい資料も含まれ、第１・２区など、さらに西側だった可能性もある。

墨書土器を出土した第９断面穴の位置が確定できないが、第＿区の中ほどだった可能性が高い。「教昊寺」は、『出雲国風土記』の寺・新造院記載の内、唯一の寺号を記される寺となっている。沢遺跡からは、「寺」墨書土器や軒丸・軒平瓦が出土していることから、近くに『出雲国風土記』に記される教昊寺があったか。

沢遺跡では古代の遺構は確認されず、遺物もほとんどが小片だったことから、出土遺物は流れ込みによると思われる。出土遺物の多くが砂層及び砂層上面からの出土で、調査時に杭列が検出されていることからも、調査地は川の中だったと考えられる。この付近が川だったとすると、古代山陰道が通っていた可能性は低く、近年の研究（中村2022）に示されるとおり、古代山陰道は南側の丘陵上を通っていたか。

註

（１）この遺跡は教昊寺跡と呼ばれているが、『出雲国風土記』記載の教昊寺を示す確実な遺構はなく、現地の地名から「野方廃寺」と呼ぶべき遺跡である。事実、そう呼称する研究者もいるが、周知の埋蔵文化財包蔵地としての名称が教昊寺跡であることから、本報告では教昊寺跡と呼ぶ。教昊寺跡出土瓦の型式名は、以下の報告書による。
　安来市教育委員会1985『教昊寺』

（２）島根県埋蔵文化財調査センターに保管されていた当時の資料の中には、島根県教育委員会『県道米子・広瀬線道路改良事業に伴う沢遺跡発掘調査概要』昭和54年３月という印刷物が残されていた。これは、発掘調査の委託者である県土木部に提出された成果品の控えだったと思われるが、公表されていなかったものか。

（３）昭和62年の特別展で展示されている。展示図録には、墨書土器の存在から官衙関係の遺構があったと記される。
　島根県立八雲立つ風土記の丘資料館1987『開館15周年記念特別展「八雲立つ出雲国」奈良時代の都と出雲びとの世界』

（４）現在は、中村太一氏による南側の丘陵上を通る説が示されているが、以前は沢遺跡付近を古代山陰道が通ったとする説もあった。
　中村太一2022年「征西道の復元」『山陰地域における古代交通の研究』島根県古代文化センター
　島根県古代文化センター2014『解説出雲国風土記』

（５）1980年に安来市教育委員会によって調査され、下記報告書に掘立柱建物が検出されたことが記されている。
　安来市教育委員会2000『潜戸谷遺跡』

（６）肉眼でもかすかに文字が見える。実測図の墨書は、島根県古代文化センターが撮影した赤外線写真を参考に作成した。
　島根県古代文化センター2003『島根県内出土文字資料集成Ⅰ』

（７）近年の調査成果を踏まえた分類が以下の報告書に示されている。
　奈良文化財研究所2005『平城宮発掘調査報告書ⅩⅥ』

参考文献

島根県教育委員会1994『臼コクリ遺跡・大原遺跡』
島根県教育委員会1993『越峠遺跡・宮内遺跡』
島根県教育委員会2013『史跡出雲国府跡－９－』
島根県教育委員会1984『高広遺跡発掘調査報告書』
島根県教育委員会1996『徳見津遺跡・目廻遺跡・陽徳寺遺跡』
島根県教育委員会1995『陽徳遺跡・平ラⅠ遺跡』
島根県古代文化センター2014『解説出雲国風土記』
島根県古代文化センター2003『島根県内出土文字資料集成Ⅰ』
重要文化財清水寺本堂保存修理委員会1992『重要文化財清水寺本堂保存修理工事報告書』
妹尾周三2005「山陰に広がる上淀廃寺式軒丸瓦」『考古論集』川越哲志先生退官記念事業会
妹尾周三2011「出雲へ伝わった仏教の特質」『古代出雲の多角的研究』島根県古代文化センター
中村太一2022「征西道の復元」『山陰地域における古代交通の研究』島根県古代文化センター
花谷浩2010「古代寺院の瓦生産と古代山陰の領域性」『出雲国の形成と国府成立の研究』島根県古代文化センター
安来市教育委員会2000『潜戸谷遺跡』
安来市教育委員会1985『教昊寺』
安来市教育委員会1986a『教昊寺２』
安来市教育委員会1988『沢遺跡発掘調査概報』
安来市教育委員会1986b『古市遺跡』

挿図出典

第１図　国土地理院の1/50,000地図(米子、松江)を使用して作成した。
第２図　安来市教育委員会1985『教昊寺』・1986『教昊寺２』、島根県教育委員会1979『県道米子・広瀬線道路改良事業に伴う沢遺跡発掘調査概要』に掲載された図を合成して作成した。

第１表　沢遺跡出土丸瓦　調査区集計表

	平行タタキ	細かい斜格子タタキ	縄・模骨	ナデ・模骨	縄	ナデ	摩滅欠損	計
第1区						2		2
第5区						3		3
第6区				1		2	1	4
第8区		3			4	12	2	21
第12区						1		1
第13区		1				2		3
第14区					1	4		5
第15区						2		2
第17区						1		1
第18区						1		1
第19区					1	1	2	4
第20区	4	4	2	4	8	42	5	69
第20'区						3	1	4
第21区				1		3		4
第22区						1		1
第24区						1		1
第＿区					1	4		5
第3断面穴					1	1		2
第4断面穴					1			1
第5断面穴					1			1
第15断面穴						1		1
計	4	8	2	6	18	87	11	136

第２表　沢遺跡出土石器・土器・土製品・石製品観察表

挿図番号	調査区	層位	出土年月日	種別	器種	法量（㎝）						石材		備考
						長さ	幅	厚さ						
第3図	注記・荷札無し			石器	剥片	2.1	1.2	0.7				黒曜石		楔形石器か

挿図番号	調査区	層位	出土年月日	種別	器種	法量（cm）			色調		胎土	焼成	調整	備考
						口径	器高	底径	外面	内面				
第4図１	中学生採集			弥生土器	甕				2.5YR7/3 淡赤橙	7.5YR7/4 にぶい橙	0.5㎜程の白色・赤色の砂粒を多く含む	良好	ナデ・ケズリ	二重口縁
第4図2	第20区	砂層	780919	弥生土器	壺底部			(6.8)	10YR8/3 浅黄橙	2.5Y8/2 灰白	0.5㎜程の灰色の砂粒を非常に多く含む	良好	ナデ	器壁が厚い
第4図3	注記・荷札無し			土師器	低脚坏				2.5YR6/6 橙	2.5YR6/6 橙	1㎜ほどの白色の砂粒を少量含む	良好	ナデ	
第4図4			780404	土師器	高杯				7.5YR7/8 黄橙	7.5YR8/6 浅黄橙	白色・暗赤褐色の小砂粒を含む	良好	ナデ、内面ケズリ	
第4図5	注記・荷札無し			土師器	鉢	(12.2)	(4.5)		10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	白色の微砂粒を含む	良好	外面下半はケズリ	内面摩滅
第4図6			780404	土師器	壺	(10.8)			10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	白色・暗赤褐色の小砂粒をやや多く含む	良好	ナデ・ケズリ	
第4図7			780904	土師器	壺	(12.0)			10YR7/2 にぶい黄橙	10YR7/2 にぶい黄橙	透明・赤色の小砂粒を含む	良好	ナデ・ケズリ	出土年月日は790409の可能性あり
第4図8		表採	780404	土師器	甕				2.5YR4/2 灰赤	10YR6/3 にぶい黄橙	0.5㎜程の白色の砂粒を多く含む	良好	ヨコナデ・ハケメ・ケズリ	体部外面にススが付着
第4図9			780904	土師器	甕	(18.6)			7.5YR7/6 橙	10YR7/3 にぶい黄橙	0.5㎜程の白色の砂粒を含む	良好	ナデ・ケズリ	
第4図10		表採	780904	土師器	甕	(22.2)			10YR6/6 明黄褐	10YR5/1 褐灰	2㎜程の白色の砂粒をやや多く含む	良好	ナデ・ケズリ	出土年月日は790409の可能性あり
第4図11	注記・荷札無し			須恵器	蓋	(14.4)			2.5Y7/1白	2.5Y7/1白	白色の小砂粒を少し含む	やや軟質	ナデ	
第4図12		表採	780404	須恵器	坏	11.8	5.4		7.5Y6/1灰	7.5Y6/1灰	白色・黒色の微砂粒を少し含む	良好	ナデ・ケズリ	最大径12.2㎝
第4図13			780404	須恵器	瑳				2.5Y6/1 黄灰	N7/灰白	白色の微砂粒を少量含む	良好	ナデ	
第4図14	注記・荷札無し			須恵器	蓋	(11.8)			N6/灰	N6?灰	白色の小砂粒をわずかに含む	良好	ナデ	
第4図15	第15断面穴	黒色粘質土層	780831	須恵器	高坏			(9.8)	5Y7/1灰白	5Y6/1灰	透明な微砂粒を含む	やや軟質	ナデ	
第4図16	第15区	砂層	780918	須恵器	甕				5Y7/2灰白	5Y6/1灰	白色の小砂粒を少し含む	良好	並行タタキカキメ・同心円文当て具	
第5図１	第20区	砂層	780926	須恵器	蓋				5Y7/2灰白	5Y6/1灰	黒色・白色の小砂粒をわずかに含む	良好	灰かぶり・ナデ	つまみ径(5.7)
第5図2	第9断面穴	黒色粘質土層	780831	須恵器	坏	(11.5)	4.6	(8.2)	N6/灰	N6/灰	白色の小砂粒をやや多く含む	良好	ナデ・回転糸切り	
第5図3	注記・荷札無し			須恵器	坏	11.0	4.8	8.8	10BG6/1 青灰	5GY6/1 オリーブ灰	1～2㎜の白色の砂粒をやや多く含む	良好	ナデ・回転糸切り	「寺」墨書。歪みあり。調査日誌では780906砂層(第2)
第5図4	第＿区	砂層上面	780825	須恵器	皿E	(9.6)	2.4	(6.5)	N7/灰白	7.5Y7/1 灰白	白色・黒色の微砂粒をわずかに含む	良好	ナデ	口縁部にスス付着
第5図5	第19区	砂層	780918	須恵器	高台付き皿？				2.5Y6/1 黄灰	N6/灰	白色の砂粒を少し含む	良好	ナデ	器壁が厚い。壺か？
第5図6	第14区	砂層上面	780908	須恵器	壺			(9.0)	N6/灰	5 YR6/6 橙	白色の小砂粒をやや多く含む	良好	ナデ	底部未調整
第5図7	注記・荷札無し				移動式竈				2.5Y8/2 灰白	10YR8/2 灰白	1㎜程の白色の砂粒を多く含む	酸化炎焼成で硬質	ケズリ・ナデ	底面スノコ状圧痕・外面にハケ目をわずかに残す
第5図8	表採		780404	土師器	小皿			3.9	2.5Y8/3 淡黄	2.5Y8/3 淡黄	白色・赤色の微砂粒を含む	酸化炎で軟質	ナデ	底部回転ヘラ切り
第5図9	注記・荷札無し			土師器	小皿			4.0	10YR6/3 にぶい黄橙	5YR6/4 にぶい橙	砂粒をあまり含まない	酸化炎で軟質良好	ナデ	回転糸切り
第5図10	第3断面穴		780830	土師器	小皿	8.2	2.5	5.0	5YR6/4 にぶい橙	5YR7/6橙	砂粒をあまり含まない	酸化炎で軟質良好	ナデ	回転糸切り口縁部にタール痕
第5図11	第21’区	粘砂層(灰色)	780926	石製品	砥石									風化が進む。

第３表　沢遺跡出土瓦観察表（１）

挿図・番号	調査区	層位	出土年月日	器種	色調		胎土	焼成	凸面	凹面	備考
					凸面	凹面					
第6図１	第8区	砂層上面	780822	軒丸瓦	5Y7/1灰白	2.5'7/1灰白	0.5㎜程の白色・灰色の砂粒を含む	やや軟質			教昊寺Ⅱb型式 780913第1•2区？
第6図２	第8区	砂層上面	780822	軒丸瓦	N6/灰	N5/灰	0.5㎜程の白色の砂粒を含む	還元炎で硬質			教昊寺Ⅱb型式
第6図3	第8区	砂層上面	780922	軒丸瓦	5Y8/1灰白	5Y7/1灰白	白色・灰色の小砂粒を含む	良好			教昊寺Ⅲ型式
第6図4	第21区	粘砂(灰色)	780921	軒丸瓦	N3/暗灰	N3/暗灰	白色の砂粒を含む	還元炎焼成			瓦当なし
第6図5	第20区	砂層	780922	軒平瓦	N6/灰		白色の小砂粒を多く含む	良好			教昊寺Ⅲ型式
第6図6	第8区	砂層上面	780822	平瓦	10YR4/1 褐灰	10YR3/3 暗褐	1㎜程の白色の砂粒を含む	酸化炎気味だが硬質	縄タタキ	ナデ？ 横骨痕	軒平瓦か
第6図7	第20区	砂層	780919	平瓦	10YR3/1 黒褐	10YR2/1黒	2〜3㎜の灰褐色の砂粒を含む	硬質	斜格子	横骨痕	端面にも斜格子タタキ
第7図1	第20区	砂層	780919	丸瓦	5YR5/1褐灰	5YR5/6 明赤褐	1〜5㎜の白色の砂粒を含む	酸化炎だが良好	平行タタキをナデ消す	横骨痕 布の合わせ目	側部に分割突帯痕？
第7図2	第20区	砂層	780919	丸瓦	5Y7/1灰白	2.5Y7/2灰黄	1㎜程の白色の砂粒をやや多く含む	酸化炎気味で軟質	平行タタキ	横骨痕 紐状圧痕	
第7図3	第20区	砂層	780926	丸瓦	2.5YR6/6橙	7.5YR8/2	1〜2㎜の白色・赤色の砂粒を多く含む	酸化炎で軟質	平行タタキをナデ消す	横骨痕 分割突帯痕？	
第7図4	第20区	砂層	780926	丸瓦	2.5Y7/2灰黄	2.5Y6/3にぶい黄	白色の小砂粒を多く含む	酸化炎気味だが良好	細かい斜格子タタキ	布の合わせ目	横骨痕?
第7図5	第20区	砂層	780922	丸瓦	7.5Y6/1灰	N6/灰	2㎜以下の白色の砂粒を多く含む	還元炎で硬質	細かい斜格子タタキ	横骨痕 布の合わせ目	広端部。端面に糸切り状の痕跡
第7図6	第20区	砂層	780922	丸瓦	N3/暗灰	2.5Y5/2暗灰黄	1㎜以下の白色・灰色の砂粒を非常に多く含む	酸化炎気味だが良好	細かい斜格子タタキ	横骨痕 粘土板の継ぎ目	
第7図7	第20区	砂層	780926	丸瓦	N7/灰白	N6/灰	1〜2㎜の白色の砂粒を多く含む	還元炎で硬質	縄タタキ	横骨痕	広端部か
第7図8	第20区	砂層	780922	丸瓦	N7/灰白	N3/暗灰	1㎜以下の白色の小砂粒を多く含む	還元炎で硬質	ナデ。細かい斜格子か	横骨痕 分割突帯痕？	狭端部 無段式
第7図9	第20区	砂層	780926	丸瓦	5Y8/1灰	5Y8/1灰	1㎜程の白色・灰色の砂粒を含む	酸化炎気味で軟質	ナデ	横骨痕	狭端部・隅落とし 無段式
第7図10	第20区	砂層	780922	丸瓦	2.5YR5/4 にぶい赤褐	2.5YR5/3 にぶい赤褐	1㎜以下の白色の砂粒を多く含む	酸化炎だが良好	ナデ	横骨痕	側面に分割痕を残す。
第8図1	第__区	砂層上面	780826	丸瓦	7.5Y7/1灰白	7.5Y7/1灰白	1〜2㎜の白色の砂粒を含む	良好	縄タタキ ナデ		隅落とし 無段式
第8図2	第20区	砂層	780926	丸瓦	2.5Y6/1黄灰	2.5Y7/2灰黄	1㎜以下の白色の砂粒を含む	良好	縄タタキをナデ消す	紐状圧痕	広端部
第8図3	第8区	砂層上面	780822	丸瓦	5Y8/2灰白	5Y8/1灰白	1〜2㎜の灰色の砂粒を含む	還元炎だが軟質	縄タタキをナデ消す		隅落とし 無段式か
第8図4	第５断面穴	第2砂層	780901	丸瓦	5Y6/1灰	5Y6/1灰	1〜5㎜の白色砂粒を多く含む	良好	縄タタキをナデ消す	布の合わせ目	無段式か
第8図5	第20区	砂層	780919	丸瓦	10YR7/3 にぶい黄橙	7.5YR8/3 浅黄橙	2㎜程の白色・赤色の砂粒を含む	酸化炎で軟質	縄タタキをナデ消す	布が挟み込まれた段が残る	
第8図6	第20区	砂層	780919	丸瓦	7.5Y7/1灰白	10Y7/1灰白	1〜5㎜の白色の砂粒を含む	良好	縄タタキをナデ・ケズリで消す	溝状のくぼみあり、分割突帯痕か	
第8図7	第20区	砂層	780822	丸瓦	N5/灰	N5/灰	1〜5㎜の白色の砂粒を含む	良好	縄タタキをナデ消す	布の合わせ目	
第8図8	第20区	砂層	780819	丸瓦	N6/灰	N6?灰	1〜2㎜の白色の砂粒を多く含む	良好	縄タタキをナデ消す		
第8図9	第20区	砂層	780919	丸瓦	2.5YR6/2 灰赤	2.5YR6/2 灰赤	1〜2㎜の白色の砂粒を含む	酸化炎気味だが良好	ナデ消す。縄タタキか	布の合わせ目	
第8図10	第22区	灰色粘砂層	780929	丸瓦	2.5Y6/1黄灰	5Y8/1灰白	2㎜程の白色の砂粒を含む	良好	縄タタキをナデ消す	布のよじれ	広端部か
第8図11	第４断面穴	砂層上面	780830	丸瓦	2.5Y8/2灰白	2.5Y7/2灰褐	1㎜程の白色の砂粒をやや多く含む	酸化炎気味でやや軟質	太い縄タタキ	紐状圧痕	
第9図1	第20区	砂層	780926	丸瓦	N4/灰	N5/灰	1〜5㎜の白色の砂粒を多く含む	良好	ナデ		
第9図2	第20区	砂層	780919	丸瓦	5Y6/1灰	N7/灰白	1〜2㎜の白色の砂粒をやや多く含む	良好	ナデ	横骨痕	
第9図3	第21区	粘砂層 (灰色)	780922	丸瓦	2.5Y7/2灰黄	2.5Y7/2灰黄	1㎜以下の白色・灰色の砂粒を含む	良好	ナデ		無段式
第9図4	第8区	砂層上面	780822	丸瓦	7.5Y4/1灰	7.5Y4/1灰	5㎜ほどの白色の砂粒を含む	良好	ナデ	布の合わせ目 粘土板の合わせ目か？	
第10図1	第20区	砂層	780926	平瓦	N5/灰	2.5Y8/1灰白	0.5㎜程の白色の砂粒をやや多く含む	良好	平行タタキ・カキメ	横骨痕	
第10図2	第8区	砂層上面	780822	平瓦	5Y7/1灰白	5Y6/1灰	1㎜以下の黒色の小砂粒を含む	還元炎だが軟質	太く深い平行タタキ	横骨痕	
第10図3	第8牟	砂層上面	780822	平瓦	7.5YR7/6橙	7.5YR8/6 浅黄橙	1㎜程の黒色・赤色の砂粒を含む黒色の砂粒を多く含む	酸化炎で三室	平行タタキを帯状にナデ消す	横骨痕か？	
第10図4	第8区	砂層上面	780822	平瓦	N6/灰	5Y7/1灰白	1㎜以下の白色の砂粒を多く含む	良好	小さな斜格子タタキ		
第10図5	第20区	砂層	780919	平瓦	5Y5/2灰 オリーブ	5Y7/1灰白	1㎜以下の黒色・白色の小砂粒を少し含む	良好	小さな斜格子タタキ	横骨痕	端面に糸切り痕状の条線を残す
第10図6	第20区	砂層	780926	平瓦	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	1㎜以下の白色・赤色の小砂粒を多く福	酸化炎焼成	小さな斜格子タタキ	横骨痕	
第10図7	第20区	砂層	780926	平瓦	5YR7/6橙	5Y7/1灰白	1㎜程の白色・赤色の砂粒を含む	酸化炎焼成	斜格子タタキ		
第10図8	第__区	砂層上面	780828	平瓦	2.5YR8/1 灰白	2.5YR7/3 浅黄	1〜2mmの褐色・赤色の砂粒を含む	酸化炎で軟質	斜格子タタキ		

第４表　沢遺跡出土瓦観察表（２）

挿図・番号	調査区	層位	出土年月日	器種	色調		胎土	焼成	凸面	凹面	備考
					凸面	凹面					
第10図9	第20区	砂層	780919	平瓦	5Y7/1灰白	2.5Y7/2灰黄	砂粒をあまり含まない	良好	平行タタキによる擬格子	横骨痕	
第10図10	第24区		781016	平瓦	2.5Y6/2灰黄	10YR8/2 灰白	1㎜以下の褐色・灰色の砂粒を少し含む	酸化炎焼成気味でやや軟質	平行タタキによる擬格子	横骨痕	
第10図11	第20区	砂層	780926	平瓦	5Y6/1灰	5Y7/1灰白	1㎜以下の白色の砂粒をやや多く含む	良好	平行タタキによる擬格子	布のとじ合わせ	
第10図12	第20区	砂層	780919	磚？	7.5Y6/1灰	2.5Y7/3浅黄	1～2㎜の赤褐色の砂粒を含む	酸化炎気味	平行タタキ	同心円文当て具	
第11図1	第４断面穴	砂層上面	780830	平瓦	5Y8/2灰白	7.5Y6/1灰	5㎜以下の白色の砂粒を含む	酸化炎気味でやや軟質	太い縄タタキ	横骨痕	
第11図2	第20区	砂層	780919	平瓦	2.5Y8/1灰白	2.5Y7/3浅黄	1～2㎜の灰色・白色の砂粒を含む	良好	縄タタキ	横骨痕	
第11図3	第20区	砂層	780919	平瓦	N6?灰	N6?灰	1㎜程の白色の砂粒を多く含む	還元炎で良好	縄タタキ	横骨痕	
第11図4	第15区	砂層	780918	平瓦	10Y7/3にぶい黄橙	10Y7/4にぶい黄橙	1～2㎜の白色の砂粒をやや多く含む	酸化炎焼成されるが良好	縄タタキ	幅の狭い横骨痕	
第11図5	第19区	砂層	780919	平瓦	10Y7/1灰白	7.7Y7/1	1～2㎜の灰色・白色の砂粒を多く含む	良好	縄タタキ	横骨痕	
第11図6	第20区	砂層	780922	平瓦	2.5Y5/1黄灰	2.5Y5/1黄灰	1～2㎜の白色の砂粒を含む	良好	縄タタキをナデ消す	横骨状の痕跡	湾曲が少ない
第11図7	第19区		781016	平瓦	7.5Y7/3浅黄	7.5Y8/3浅黄	1㎜ほどの白色・灰色の砂粒を含む	良好	縄タタキ	横骨痕か？	
第11図8	第20区	砂層	780926	平瓦	5Y8/1西伯	5Y8/1西伯	1㎜ほどの白色・灰色・褐色の砂粒を含む	良好	縄タタキをナデ消す	幅の狭い横骨痕	
第11図9	第20区	砂層	780922	平瓦	10YR8/2 灰白	10YR8/3 灰白	2～3㎜の灰色の砂粒を多く含む	酸化炎気味だが良好	縄タタキ		
第11図10	第8区	砂層上面	780822	平瓦	2.5Y7/1灰白	2.5Y8/1灰白	1～2㎜の灰色の砂粒をやや多く含む	還元炎だが軟質	縄タタキ		隅切り瓦
第11図11	第20区	砂層	780922	平瓦	2.5Y8/2灰白	2.5Y8/2灰白	1～2㎜の灰色の砂粒を含む	酸化炎気味で軟質	縄タタキ		隅切り瓦
第11図12	第8区	砂層上面	780822	平瓦	10Y7/1灰白	7.5Y6/1灰	1㎜程の白色の砂粒を含む	良好	凸面ナデ		凸面の端に布目が付いている
第11図13	第21区	粘砂層（灰色）	780922	平瓦	5Y8/1灰白	7.5Y8/2灰白	1㎜以下の白色・灰色の砂粒を少し含む	良好	ハナレ砂	凹面にスノコ状の圧痕を残す	

第５表　沢遺跡出土平瓦　調査区集計表

	平行タタキ	細かい斜格子タタキ	斜格子	平行タタキによる格子	平行＋同心円文	縄・横骨	ナデ・横骨	縄	ハナレ砂	ナデ	摩滅欠損＋横骨	摩滅欠損	計
第3区											1		1
第5区		1		1						1			3
第6区		1						4				3	8
第8区	6	5				2		9	1	6	2	11	42
第13区						2							2
第14区	1	2	1					3				3	10
第15区							1	2		2			5
第16区		1								1			2
第18区	1												1
第19区				1			1	6		4		1	13
第20区	6	29	9	2	1	2	12	53	5	10		22	151
第20'区												2	2
第21区		4					1	4		3		1	13
第24区		1		1			2	3		1			8
第＿区	1	1		1			1	2			2	2	10
第3断面穴						2		1				1	4
第4断面穴							1						1
第5断面穴										1			1
第9断面穴		1											1
第15断面穴			1							1			2
不明							1	3				1	5
計	15	46	11	6	1	8	20	90	6	30	5	47	285

西側の調査区のいずれか（西から）

第 6 区土層堆積状況（北西から）

第＿区作業風景（西から）

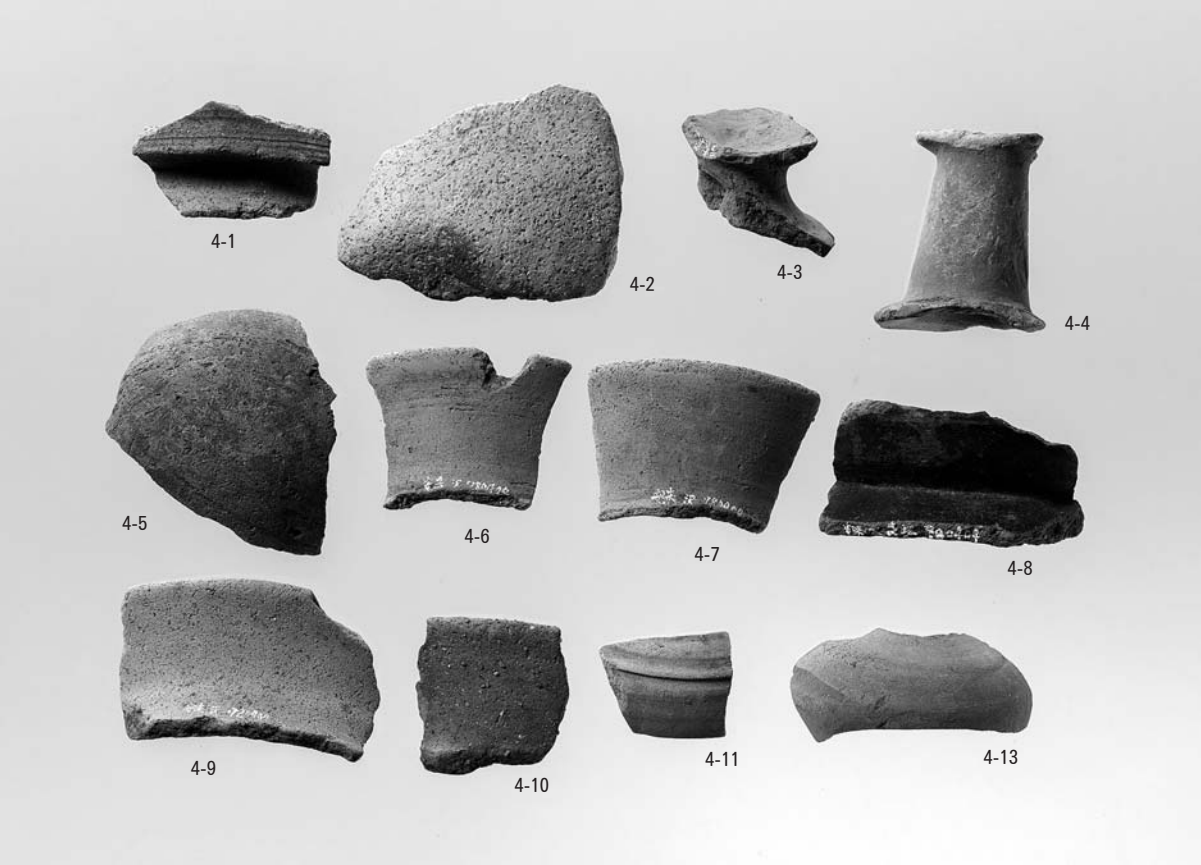
第 9 断面穴墨書土器出土状況（北西から）

第13区土層堆積状況（北から）

第14区完掘状況（北から）

第24区完掘状況（北西から）

沢遺跡作業風景（第13区付近か？ 西から）

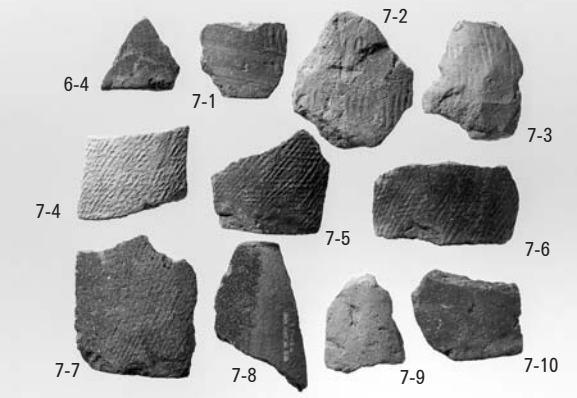


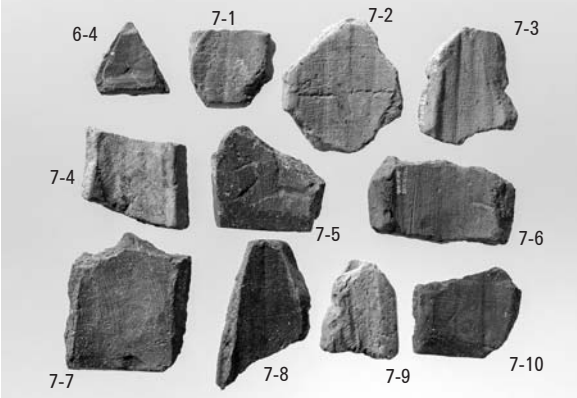
沢遺跡出土器（1）

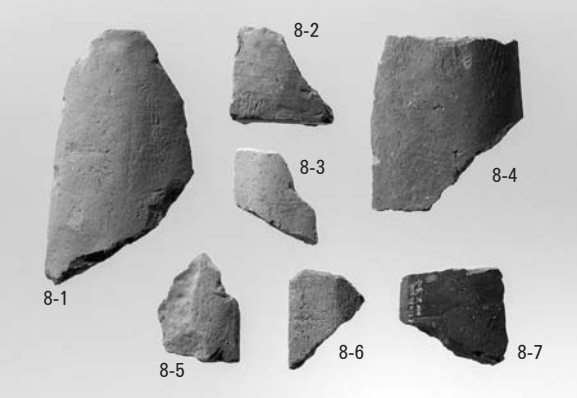
沢遺跡出土土器（2）・石製品

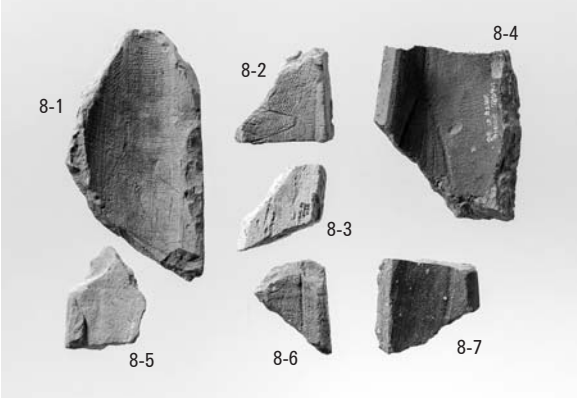
沢遺跡出土石器・土器（３）

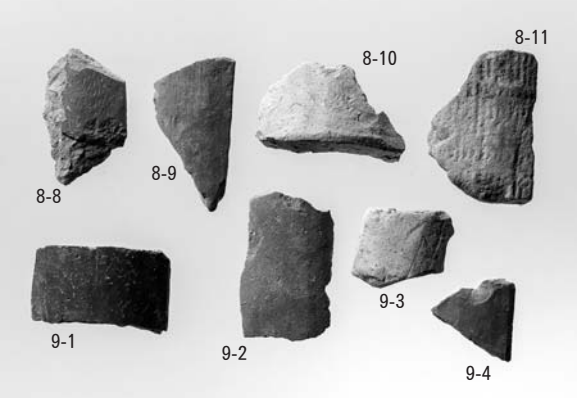
沢遺跡出土軒丸瓦・軒平瓦・平瓦端面

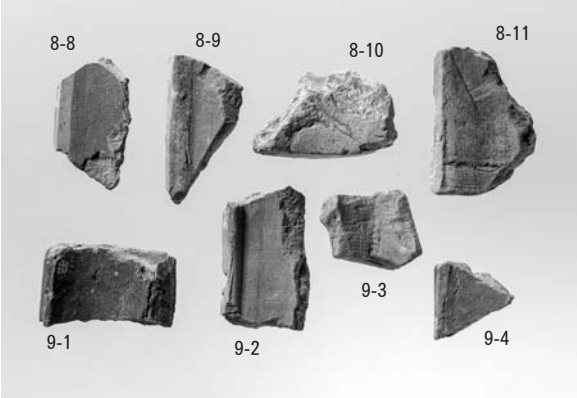

6-4
7-1
7-2
7-3
7-4
7-5
7-6
7-7
7-8
7-9
7-10


6-4
7-1
7-2
7-3
7-4
7-5
7-6
7-7
7-8
7-9
7-10

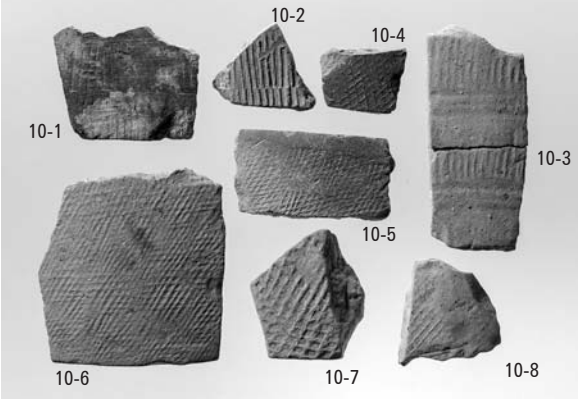

8-1
8-2
8-3
8-4
8-5
8-6
8-7

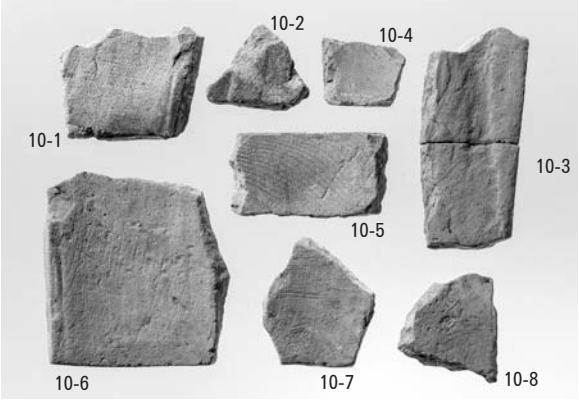

8-1
8-2
8-3
8-4
8-5
8-6
8-7

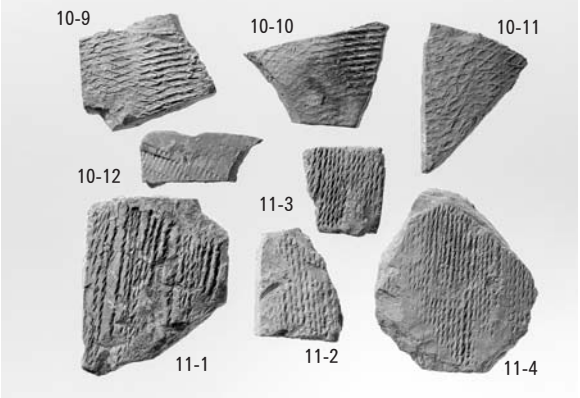

8-8
8-9
8-10
8-11
9-1
9-2
9-3
9-4

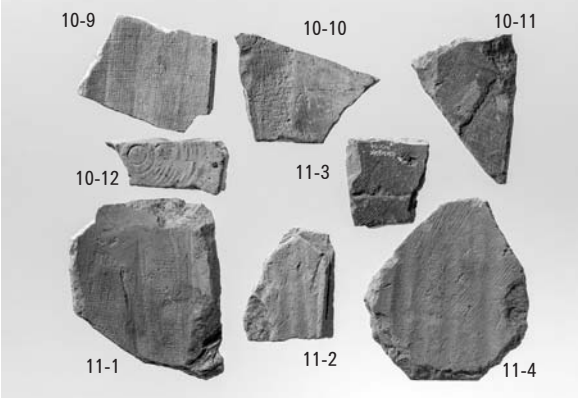

8-8
8-9
8-10
8-11
9-1
9-2
9-3
9-4

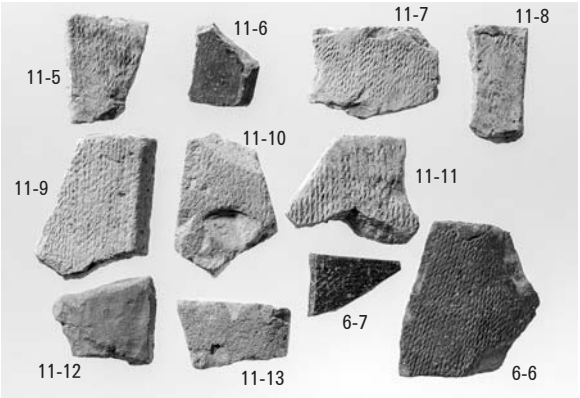
沢遺跡出土丸瓦

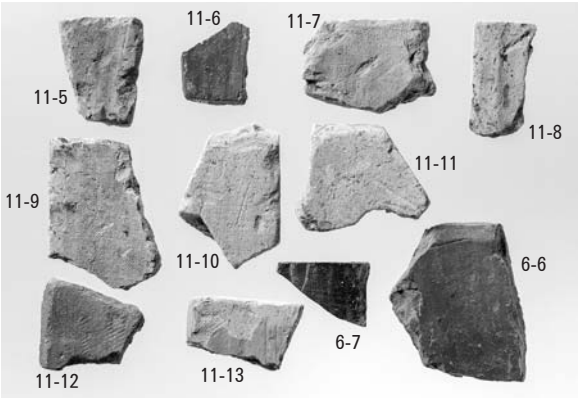

10-1
10-2
10-3
10-4
10-5
10-6
10-7
10-8


10-1
10-2
10-3
10-4
10-5
10-6
10-7
10-8


10-9
10-10
10-11
10-12
11-3
11-1
11-2
11-4


10-9
10-10
10-11
10-12
11-3
11-1
11-2
11-4


11-5
11-6
11-7
11-8
11-9
11-10
11-11
6-7
11-12
11-13
6-6


11-5
11-6
11-7
11-8
11-9
11-10
11-11
6-6
6-7
11-12
11-13

沢遺跡出土平瓦